

【沖縄戦を語る】

急造爆雷をかついで

K・N（当時十五歳）

無線隊に配属される

昭和十九年、沖縄県立第一中学校二年生るとき、軍需工場に動員された。そこで働いているのはほとんどが学生であった。動員は軍事教練ということで正規の授業のなかに組み込まれていた。各学校には配属将校がいて、その権限は校長よりも上であった。ほとんどが本土出身の人で、私たちの学校には藤原中尉が配属されていた。

十・十空襲の時、私は普天間に住んでいた。その日、汽車はまだ運行しており、軍人が、「あれは演習だな」など言っていたぐらいである。しかし、大山駅に着くと空襲だということがわかり、それからは大混乱であった。日本軍は高射砲で対抗していた。

私が召集されたのは昭和二十年三月の末であった。それまでは召集令状がいつ来るかわからないから家で待機しておくようにと言われていた。

昭和二十年三月二十三日の空襲の時、私は家に父だけを残して、荷馬車に食糧などを乗せて家族を今帰仁村に疎開させた。そして今帰仁から帰ってみると召集令状が来ていたのである。だが、どの隊に配属されたのかよくわからなかった。幸い、普天間国民学校に通信隊が駐屯していたので、そこに行ってみた。しかし、召集先はそこでもなかった。それで、現在の普天間公設市場の上にあった部隊に行き、事情を説明し、軍のトラックで首里の繁多川にある本部に行った。そこで私は、第六中隊に配属されたことがわかった。

第六中隊というのは津嘉山（旧南風原村・現町）に本部のある無線隊であった。中隊に着くと、私はいきなりビンタを張られた。私はなんでも殴られているのかわからなかったため、何度も殴られた。後になっ

て聞いてみると方言を使ったということが理由であった。それから中隊長のところに連れて行かれ、宣誓をした。それが済むと正式に入隊したということで、私は軍帽や軍服の支給を受けた。

昭和二十年四月一日、米軍が上陸した後、私は本部と中隊との通信を担当した。また、持久戦になるということで、壕の中に井戸を掘りはじめたりした。そのほかに伝令などにも行かされた。伝令には二人で行くことになっていた。後で知ったのだが、私たちが無線で通信したことはすべて米軍傍受されていたとのことである。

急造爆雷班に編入

食事は一日に三回であった。そして、各部隊では水汲み、炊き出しなど、それぞれ分担が決められていた。壕の中には炊事場はなく、畑などで炊事をしていた。私は、でき上がった食事を壕に運ぶ途中、近くに落ちた爆弾の破片を脊髄の近くに受けた。幸い、私たちの中隊には軍医がいたので手当してもらって助かることができた。

同じ隊に首里出身の友人がいたが、家族に会うために壕を抜け出し、帰ってきたところを処罰ということで寝ないで立たされつづけ、明け方、処罰が終わってまもなく爆弾が落ち、指を二本切ってしまったことがあった。私たちはこの二本の指を火葬にした。すでに四月の中旬であったが、米軍はまだ首里までは来てなかった。

私たちは食べざかりで、いつも腹を空かしていた。なかには空腹に耐えかねて逃げ帰る人もいた。便所は外にあり、壕の入口には衛兵が立っているのです、「何々二等兵、かわやに行つて来ます」と言つて外に出るのである。私たちはこの壕に五月の中旬頃まで、一ヵ月ぐらいいた。しかし、伝令の仕事のほかはあまり危険はなかった。

私たちの中隊の壕は中が二階になっていて、寝台は二段式になっており、私の下の寝台には中隊長がいた。それで、私は寝返りをうつこともできず、大変困った。寝る時まで気を使わなければならず、そのうえシラミもいるので余計に困った。

ある時はスパイがいるということで、軍曹に緊急に集められ、靴でぶん殴られたこともある。また、あるときは食事を運ぶ途中、担いでいた食事をひっくり返し、一個分隊全員、食事抜きにされたこともある。鍋をひっくり返し配給することもできず、蒼ざめて突っ立っていると、分隊長に靴を投げつけられた。その頃、私は叱られてばかりいた。しかし、私は無線隊であつたからまだいい方で、有線隊に配置された学友はもっと大変であつた。有線は爆撃などがあると線が切れることがある。それで、そのたびに修復しなければならず命がけであつた。

私たちは西原村から与那原を通つて津嘉山まで来ていた。実際には退去であつたが、隊ではそのことを転進といつていた。

五月の中旬頃、私たちが各分隊に帰つたら罐缶の配給があつた。そして、いざというときのために手榴弾も手渡された。私は急造爆雷班に編入されたのである。急造爆雷とは、木の箱にダイナマイトを詰めただけのものである。

他の通信隊も斬り込み隊や、戦闘員に編入されたのであつた。約三〇センチ四方の木箱にダイナマイト詰めて、それに信管を取りつけて爆弾にしたものを担がされたのである。

転進する場合、爆雷だけを担ぐのではなく、手榴弾や米など持てるだけのものを持たされた。私たちはすでに体力の限界を越え、精神力でやっと動けるようなものであつた。休憩のとき土手にもたれると、すぐ立って歩くことはできなかった。

部隊ほとんど全滅

道は首里からの避難民であふれていた。また、負傷した人、道端にころがった死体などで足の踏み場所さえなかった。私たちは津嘉山から八重瀬岳（旧東風平村・現町）の手前の丘に行った。そこには壕もなく、また壕を掘ることもできず、石垣を作り、砲弾で倒れた松などを上にかぶせただけの所に、約十日間とじこもっていた。

そこにいる間に食糧は全部尽きてしまった。炊事は当番でやっていた。はじめの頃は乾パンがあっただけけれども、それが尽きると、どこからか拾ってきても作らなければならなかった。畑から小指大の芋を拾って来たり、死んだ兵隊の持ち物を探ったりした。雨が降り続けていたので、水は近くの水たまりから汲んで使っていた。部隊は分散し、組織的機能は失っていたが、何とか行動していた。

米須部隊(旧摩文仁村・現糸満市)を通り真壁部隊に入ったが、私たちはそこでもだいぶやられた。米須の手前には池があっただが、そのほとりは死体がごろごろ転がって、池の中にはいくつもの死体が浮かんでいた。そこから山城部落(旧喜屋武村・現糸満市)へ移動した。そこには壕があっただけで入ることにしたが、ふしぎなことに民間人は一人もいなかった。それから、八重瀬岳の壕に置いて来た荷物を取りに引き返した。

私は負傷して残されていた島袋政弘を連れ、山城部落に戻った。帰って来てしばらくすると急造爆雷班集合という命令が出た。そして戦闘配置につけということで、爆弾を担いで戦車に体当たりするために窪地に潜んでいた。

しかし、命令を下した小隊長は戦闘経験のない見習い士官であったので、壕から出ていくことができないでいた。それで今度は退去を命じたのである。私は退去して壕に逃げ込むことができたのだが、窪地から出て来れない人もいた。そうこうしているうちに米軍に発見され、艦砲が激しくとんできた。そして、私たちの部隊はほとんど全滅したのである。島袋政弘もそのとき戦死した。昭和二十年六月十五日であった。

敵陣の真つただ中

私はこのときも無傷であった。生き残ったのは十四、五人しかいなかった。それからはもう怪我をしても治療どころのさわぎではなかった。私たちは死体を一カ所に集めると退去した。上等兵は二人生き残

ったが、あとは二等兵だけであつた。

私たちは壕から喜屋武岬の崖を下って行つた。崖の下にしばらく隠れていると、私たちは日本軍が玉砕したということを聞いた。しかし、玉砕の情報が入つた翌日、敗残兵を全員あつめて最後の総攻撃をするということになった。だが、私たちは玉砕ということを聞いて小銃を分解して海に棄ててしまつていた。命令なしに小銃を棄てたので私たちはひどく叱られた。

敗残兵を喜屋武岬に集め、真壁の最前線に行つたが、私たちは米軍の相手ではなく、引き返すしかなかった。

翌日、ふたたび集合させられた。そこに日華事変の経験がある福岡上等兵という人がいた。そして、「自分から離れずについて来い」とか、「お前の家族は国頭に行つたということだから、私がお前を家族のもとに届けてやる」と言うのであつた。「俺について来い。しかし、決して俺より前には出るな」ということであつた。上等兵と私と私の同級生二人の四人で真壁の方に向つた。私たちは彼についてあちこち転進していた。

そのとき、私は宜野湾出身だということで中隊長のところへ引つ張られていき、「宜野湾の村長がスパイをやっている。お前の家族もそうじゃないか」と言われた。村長が捕虜になっているとのことであつた。私は宜野湾が玉砕になったことを聞いて泣いた。すると中隊長は、「お前を見ていると従兄弟を思い出す。お前は従兄弟に似ている」と言うのである。

その晩はじつとして米軍の様子をうかがつていた。翌日も昼はキビ殻をかぶせた排水溝の中にじつと隠れていた。そして、夜になるのを待つて集まり、移動することになった。

小高い丘があつたのでそこを登っていると、中腹あたりでいきなり機銃掃射をされ、丘からころがり落ちた。私は爆弾で窪になつた水たまりに落ちた。私は水たまりからそつと這い出すと皆のもとに帰つた。しかし、そのときに上等兵は機銃で腹をやられ戦死してしまつた。上

等兵は、「自分にかまわず逃げろ」と言うので、私は自分の手榴弾二個を渡して彼から離れた。それから、「国頭に送り届けることができなくてすまない。何とか一人で行ってくれ」とも言っていた。

私たちはバラバラに逃げた。それで、私はもとの排水溝に引き返し、そこに隠れていた。翌日、同じ方向に行ったが、どうやら敵陣は越したようであった。

そこで夜を過ごすことになった。夜が明けると音楽が流れてきた。私は敵陣のまっただ中にいたのである。

女学生から握り飯をもらう

夜になると溝から這い出し、どこへ行こうかなどと考えながら歩いていたが、腹がへってなかなか前に進むことができなかった。芋を掘ってみたが見当たらなかった。しかし、畑で偶然にも一緒に逃げた同級生二人に出合ったのである。

私たちはこれからどうするかを相談し、とにかく避難できそうな場所を探そうということになった。

糸満を通って摩文仁へ行く途中、自然壕があったので入ろうとしたら、民間人は入るなと追い返された。

しかたなく別の壕をさがそうと歩き出すと、女の人の声が聞えて来た。女学生であった。私たちはその女学生に壕にいる人に事情を話してもらい、やつとのことで壕の中に入れてもらうことができたのである。私たちはそこではじめて女学生からオニギリをもらって食べた。壕の中には水が流れていた。だが、まわりのぬかるみには軍人や民間人の死体ごろがっていた。

ある日、米軍が壕のすぐ近くまで来たとき、新垣という少年が入ってきた。それでその少年がスパイだということになり捕まったが、あとで疑いが解けて放された。

その翌日の昼頃、「米軍は女、子どもは殺さないはずだから出て行け」と命令された。「出て行かないと斬るぞ」とおどかされ、仕方な

く私たち十人位は壕を出て行った。

壕を出たあとはどこをどう歩いたのかわからないが、大里村に着いた。私たちはずっと三人一緒であった。そこでは米軍はあまり見かけなかったが、ずっと芋の葉ばかりを食べていた。

それから私たちは首里の弁ヶ獄に行った。その後は大名を通り、国場の火薬庫の近くにある壕に入り、そこで一カ月近く過ごした。近くには井戸もあったので、私たちはここに十月のはじめ頃まで隠れていた。